



SU GA TA

No.11

特定非営利活動法人
小笠原流・小笠原道場



特定非営利活動法人
小笠原流・小笠原道場

ごあいさつ

認定法人となつて最初の年となります。認定法人となりますと公益性の観点に重きを置く必要がこれまで以上に出てまいります。認識を新たにする場面も多々ありましたが、公益性を考えることも必要だということを学びました。小笠原流はロシアにありますがモスクワ中央競馬場にて8月に流鏑馬を執行了しましたが、これは日本政府とロシア政府との間で取り決められた文化交流事業でしたので、当法人としても支援をさせていただきました。また、小笠原流の活動を広く知っていただくために、御茶ノ水にあります展示会場をお借りして『小笠原流展』を開催し、流鏑馬VRの作成などを行い、理解を深めていただく内容としました。海外の方々に小笠原流に興味を持つ方が増えてきており稽古希望などの問い合わせも多くいただくようになりました。様々な活動を通して多くの方々に小笠原流を知っていただくことができるように努めてまいりますので、今後ともご支援ご理解のほどよろしくお願いいたします。



特定非営利活動法人

小笠原流・小笠原教場

理事長

小笠原清基

私の履歴書

砂口 勝紀



40年間務めた職を辞してから五年になろうとしております。最近特に小笠原流に入れていただき弓を続けてきて良かったと、しみじみと感じております。大学生弓道としてがむしやに的中でるのとだけを考えて稽古した時期もありました。そして弓道部の師範が小笠原流の先生でありましたので、体配のご指導も併せて受けておりました。先生が立ち座りの稽古を始めると、先生から砂口はいつも嫌な顔をすると言われ、あまりできの良くない部員であつたようです。弓道部は設立から日が浅く部員数も少ない中である程度の成績を残せたのは、砂口勝紀師範から基本を学び特に道場内での「無駄な動きをするな。」の教えがあつたからだと感じております。この師範との関わりは、先輩が小笠原流同門の方との繋がりがあり快く引き受けていただいたようです。前置きが少し長くなりましたが、このような経緯があり弓の魅力にとりつかれ、卒業後10年ほど経過したときに師範であつた先生にお話をする機会があり、ますます弓を学びたくなり、先生の大阪菱友会の稽古に参加させていただきました。先生は快諾くださり「月三回水曜日の夜間に住吉弓道場へきなさい。」これが小笠原流稽古の始まりでした。

菱友会の稽古は、毎回「歩く・立つ・座る」を各自が行い、先生が来られて一手3回程度指導をいただく、休憩中での先生の話が楽しくて、指導方法や話の内容は新鮮で語録としていつも記録を

ておりました。それが今も自分の稽古の糧となっています。

日頃は稽古が基本であることを稽古で心掛けております。動きの基本、決め所即ち動作には残心があり、無駄なことをしない、隙を造らない、基本が一番難しいことだと感じております。日常生活の中で稽古できるように心掛ける「歩き方十年」。これは大変難しいことではなか先は見えませんが少しでも上達できるようにと稽古しております。

習いの射術稽古の中で自分のものになるには早いもので三か月、未だに自分のものにならないものも沢山あります。先生が亡くなられて早20年を過ぎましたが未だに理解できないことを日々研鑽しており、今後の稽古課題として取り組んでおります。

また、先生に付いて奉納行事に参加をさせていただくようになった時、小笠原のことについては「宗家に習ってください。」と、一切何も申されなくなりました。小笠原流は宗家の指導のみと私どもに語らずに教えてくださったものと思っております。

さて、初めての奉納行事参加が、榎原神宮大式的介添えでした。小笠原は見学はないと、小素襖を着ていきなりの介添えで蹲踞でした。寒さと辛かったことが今でも良い記憶でございます。

大阪菱友会が当番をさせていただいたのが、源氏発祥の地、川西市の多田神社にて草鹿式を、このときは朝から雨でしたが参拝が始まると雨が止み執行直後の直会では大雨でございました。無事執り行えたのも源氏のご加護があつたのではと、ま

た、このお宮の別れの河内源氏発祥の地、羽曳野市の坪井八幡宮でもここ数年ご奉仕をしております。ここには八幡太郎義家の源氏の白旗が現存しております。熊野那智大社でのご奉納は数年続きましたが、同門の仲間と温泉巡りの小旅行のようでありました。高知城天守閣広場でのご奉納には山内家のご当主もご臨席を賜りました。近年では住吉大社で節分の追儼歩射式を執行いたしております。

海外には平成28年にアメリカのレッド・ウッド道場へ若先生・鎌形さんと道場開きに伺いました。初めてのことはかりでしたが、森の中という表現がぴたりする森閑とした道場でした。若先生の指導の下、道場の矢越の墓目、手明き介添えを務めさせていただきました。静寂の中鎗矢の音だけが響いており、気持ちの引き締まる良い経験でした。小笠原は時・所・位に応じて教わっております。道場の複雑な地形や状況でも無事の執行となりました。

滞在中にはアップルの本社での昼食、アメリカ開拓時代からのレストランと楽しいひとときでした。言葉は通じませんでしたが気持ちは通いました。

その翌年、若先生の都合が付かず私一人でレッド・ウッド道場に参りました。少し取材がと聞いており、講習会の取材だろうと気軽に考えておりましたが、テレビカメラの前に座りレンズを見て話をする事になり、簡単に答えたことに通訳の話が長いこともあり、私見で



春日大社 流鏑馬 右端：砂口



文化展参加家元 10 家の家紋コースター



日本の伝統文化展パンフレット

展は短い期間ではありましたが、各家の若主人たちによつてなされた実技実演を伴ったことを考えると日本で最初の出来事であったといえるのです。この三越での企画展で、私は少しかお手伝いをしたことで小笠原清基若宗家とお付き合いが始まることになりました。

そもそも私が若宗家と面識を得たのは、私の家の近所にあるみたけ幼稚園での行事でした。みたけ幼稚園の豊田直美園長は子供たちに本物の体験をさせようという気概に溢れた教育者で、ある時小笠原流の礼法をやりますので来ませんかとお誘いを受けました。私は、「4〜5歳の子供に礼法？」と疑問に思いながら参加することにしました。

当日、若宗家の手本に従って子供たちがお辞儀や玄関での作法を真似る姿を保護者の方々と一緒に、幼稚園生用の小さな小さな椅子に落ちないよう腰かけて観ていました。子供たちには初めての体験で、戸惑う子や、ゆっくりながら確実にできる子など様々でしたが、私の興味を惹いたのはむしろ保護者の方たちの反応でした。30歳代である保護者達は子供たちより真剣な表情をしていたのです。日本で日本人として生まれたのであれば、箸の持ち方やお辞儀の仕方ははじめとする作法は子供の時に両親から教えられるべきではありません。大きくなつてからでは遠慮して誰も教えてくれません。保護者の方々はずっと日常の仕草、立ち居振る舞いの手本となる若宗家の姿に昔自分が教えてもらつてこなかつた獲得すべき素養を、今取り戻そ

私が小笠原清基若宗家と親しくお付き合いさせていたくようになりましたのは、平成14年3月に日本橋三越本店で開催された『日本の伝統文化展』がきっかけでした。

この文化展は永きに渡り伝統を受け継いでこれた十の家元が一堂に会したもので、会した家元の格と十という家元の数は日本で初めての企画といつてもよいかと思えます。この企画をまとめられたのが清基若宗家でした。

ご存知のように、日本には、華道、茶道、香道、能楽、武道など様々な伝統文化が存在します。しかし、こうした伝統文化を一堂に幅広く、しかも

家元か、あるいはそれに近い本筋の人から学ぶところは、残念ながら日本のどこにもありません。私はある大学の評議員をしているのですが、日本の大学に留学生としてくる外国人の大半が、実際は働くために来ています。仮に、「日本について、日本文化について勉強したい」と思つても、現場、実技を一堂に学ぶところはありません。ヨーロッパにある日本の在外公館には「日本の伝統文化を学ぶにはどうしたらよいか」という問い合わせが実際にあるそうです。しかし、訊かれた職員が出せる答えがないのが実情なのです。

そうした点から、日本橋三越で開催された企画

私と小笠原流

酒井 陽太

このようなやりとりでありました。

撮影では、会における弓手を矢道から見上げるようにして矢出て行くところ、そして会から離れての弓手・馬手の動き、さらに馬手の後ろから発射的に的中する矢の軌道をとドキュメントで取材を受けました。終わって、いろいろと考えさせられ良い経験をしました。

講習会では、小笠原流を通して日本の伝統文化に触れたい・学びたいと、射術もさることながら

礼法にも意欲を示されておりました。どうしても生活習慣が異なることから私にも新鮮でありました。

結びに、当流の稽古を重ねて行くに従つて、弓が日常生活の一部となり何気ない所作に生かされていることに気がついたときの嬉しさ、またご奉仕させていただく時は、いつも真剣でありたいと願つております。その為の心構え、同門の皆様との連携、特に大式的や百々手式など厳粛な儀式の執行

は、ひとつの流れの中にある調和、協調を重要視することであり、柔らかな動きの中に鋭い発が生まれ優雅さと品格を併せて持つのが美しい射であると思います。

今後ともご宗家の指導を賜りながら精進して参りたいと存じます。





文化展会場入口



伝統文化についてのシンポジウム

うと真剣になったのだと感じました。斯くいう私も保護者の方々と同様で、その時獲得したお辞儀の仕方をその後折あることによつて見せたりしました。その日は、豊田園長のご配慮で礼法の授業の後に軽いランチとなり、その席で小笠原流の家訓「家業を生業としない」というのを若宗家から伺い、心底驚きました。実際、若宗家は製薬会社にお勤めだそうです。これは本当に凄いことです。簡単にできることはありません。勿論、身も心も先祖から引き継がれた家業に存分に注ぎ込んで生活し

ていくことも立派なことだと思います。しかし、小笠原流では伝わってきた事とその精神を自分の生活よりも高いところに位置付けているように思えます。その伝統を守ろうとする精神性の高さに私は感銘を受けたのでした。

その時の話題は様々なことに及びましたが、若宗家がふと口にした「様々な日本の伝統文化を一堂に見てもらう場ができる」といのですが、「という言葉が耳に留まりました。すかさず当時の三越伊勢丹ホールディングス社長の大西洋さんが私の

ら来られる人にも日本を理解してもらええる機会と場があつてほしいと思います。そうした場を作るときに最も重要な役割を果たすのが、いろいろな流派をつなげる力を持つ小笠原流だと思つのです。その為、教育界の方に会う機会ごと、あるいは海外業務に携わる方に会うたびに私は「日本伝統文化を学ぶ重要性和学ぶ場の必要性」を話すことにしています。

ところで、私が小学校六年生の時、読書感想文の宿題が出ました。私が選んだ本は「明治天皇と乃木希典」という本でした。乃木希典の生き方に感動したことを感想文に書いたところ、先生から

皆の前で発表を求められたことがあります。乃木大将は子供のころ、冬の日に寒いと口走つたのを聞いた父親が、外の井戸に連れていき冷水を掛けたといいいます。それ以来どんな寒い時にも寒いと口にすることはなかったというエピソードを話しました。

今、私は若宗家に乃木大将が厳しく養育されたものと似たものを感じるのです。

これからも日本人としての誇りと愛国に少しでもお役に立ちたいと思っています。

小笠原流の益々の発展を祈念いたします。



三越伊勢丹ホールディングス 手前：宗家 大西社長 奥：若宗家 酒井



展示会オープニング祝賀会 左から酒井 若宗家 大西社長



左から豊田直美園長 若宗家ご夫妻 妻 酒井シゲ子 豊田園長ご主人陽一郎さん

◆寄稿者プロフィール

酒井 陽太 (さかい ようた)

大陽工業株式会社 代表取締役社長
社会福祉法人 白陽会 理事
一般財団法人地球の石科学財団 代表理事
分社グループ(分社理念研究所)代表

高校時代の後輩であることと知っていた豊田陽一郎さん(直美園長のご主人)が「大西社長に話してみたら?」と私の背中を押したのです。

後輩であっても親しい面識は無かつたのですが、私が大西社長にその趣旨を話したところ、彼も日本の伝統文化への理解者だつたようで、日本橋三越本店での開催を決めてくれたのでした。それが冒頭に申し上げた『日本の伝統文化展』です。この『日本の伝統文化展』の企画は若宗家を中心となって立案し、実施もされました。

私はこの催事に於ける若宗家の各分野の家元の次代を継ぐ人たちを纏める力に驚くとともに、「小笠原流は今後の伝統文化界において重要な役割を果たすのでは?」と感じたのでした。

私は会社経営もしていますので、今の国際社会の激動と国内の諸問題を考えるとき、神話時代から続く日本の皇統の歴史と和を尊び、自己を厳しく律し、他に寛容な精神を醸成する日本人の精神は現代の世界に最も必要なものと感じています。海外に向かう日本からの学生には何か日本の伝統文化を「深く」とは言いませんが、身につけて行けば必ず先方から重きをもつて遇されるはずです。日本の学校に伝統文化を学ぶ学科が出来てほしいと切に願っています。

海外で活躍するようになれば、日本の歴史と日本人であることを示す伝統文化を少しでも身につけていることがどんなにか相手に信頼と安心感を与えるものか理解できるはずです。同時に、海外か

乱れ箱

脱いだ衣類や手回り品などを
一時入れておく場所



上がり框

あがるさいは、なるべく踏ま
ないようにする



子どもの礼法教室

その4 訪問について

訪問というのは万国共通の事象です。ただ、訪問の仕方は国などで違いがあります。何故そうするのかを知ることが重要で、理由がわかれば臨機応変に対応できると考えております。

イラストでこれまで紹介をしてきましたが、読まれるのは大人の方々なので今回より写真でお伝えをしたいと思います。

外套

日本ではコートなどの外套は玄関に入る前に脱ぎます。これは、日本が畳の文化つまりは低い位置で生活する文化であったことに由来します。現在では畳は無いにしろカーペットやこたつなど低い位置で生活していることに変わりは無いかと思えます。そのような生活習慣ですと、塵などは大変気になります。そのために、外の塵を室内に持ち込まないという配慮から玄関に入る前に脱ぎます。脱いだコートは玄関の近くに置くなどが一般的ではありますが、進められたら室内に持ち込みます。



靴

靴は正面を向いて脱ぐようにします。これは、迎えの方がおられた場合に相手にお尻を向けることになるためです。廻る時に上座にお尻を向けないのと同じで、相手にお尻を向けるのは失礼になります。上がり框はなるべく踏まないようにしてあがります。そして、相手にお尻を向けないようにして90度向きを変えて、跪座となり靴の方向をかえます。なお、靴を脱ぐ場所は下座側で脱ぐようにしますが、進めがあれば進められた所からあがります。玄関でいう下座は一般的には下駄箱があるほか、友待ちの方ですが家の構造などにより異なりますので、迎えの方から遠い方からあがるといってもよいと思います。



靴下

靴下は履くようにした方がよいです。人の汗や脂で室内を汚してしまうためです。夏場などは洋服の状況では素足の場合もあるかと思いますが、玄関にて靴を脱いだ際に靴下をはくようにします。草履などの場合には外を歩いている際に足袋の裏が汚れることがありますので、履き替えることも必要になる場合もあります。白は汚れがわかり、足袋は裏が厚くなっていることから人の脂や外の汚れで室内を汚さずに済みますので白い靴下とか白い足袋を履くようにと言われるのですが、道理をわかればその限りではありません。ストッキングではだめだと言われるのは薄手なものが主流なために一般論として言われるのです。



お土産

お土産がある場合には室内で渡しますが、草木や生物の場合には玄関で渡します。室内に入りましたらお土産を渡すのですが、紙袋に入っている場合には出してから渡すようにします。風呂敷に入っている場合にも出してから渡すようにします。いずれも下座脇で処理することが大切です。そして、正面を相手に向けて渡すようにします。紙袋や風呂敷自体もお土産であれば一言伝えて渡します。



子どもの礼法教室



2018年8月11日、モスクワ中央競馬場にて流鏑馬が執り行われました。日本政府とロシア政府により取り決められた日露文化交流の一環としての行事です。今回はこの舞台裏について記載したいと思います。

2017年夏に、当該の話が出て参りました。当初は執行に関わる費用の一部を小笠原流にて負担する必要があるということでしたので、現実的ではないと多くの方が思っていました。2018年1月に話が急展開となり、全てを政府予算にて拠出していただける可能性が出て参りました。ただし、予算申請をして認められるのが4月に入ってからになるということで、どのようなものかわからないままに話だけが進んでいきました。そして、3月にロシアにて打ち合わせをすることとなり、私が2泊4日で関係各所との打ち合わせにモスクワへと行き現地視察や実現させるために必要な準備などについて打ち合わせをしてまいりました。そして、4月に予算が通り執行することとなったのですが、ここから代理店を入札で決めるということがはじまり、代理店が決まるのが6月という非常に大変な予定となりました。

1月より、奉仕者の選定に入りました。今回は





流鏝馬だけではなく、ロシアの弓道関係者向けのセミナーや、礼法の講座、流鏝馬の講義、武者行列など様々な行事が予定されておりましたので、幅広く門人の方々に声をかけることとしました。総勢35名（宗家など含む）で伺いましたが、ロシアはビザが必要です。このビザ取得も大変で出発の前日になつて全員分が整うという状況でした。

流鏝馬を執行するためには相当量の道具が必要です。ハイエース3台分くらいです。これらの梱包や発送作業など二苦勞です。さらには、カルネといって税関で問題無く通れるようにする申請書類の作成などもあります。もちろん、現地で使用する馬や馬場の設営なども事前に手配する必要があります。これらのことをしてやっとロシアへと行くことができます。

そして、ここからが試練の始まりです。事前に決めていて了承されていたことがほぼ全てゼロスタート。ロシアとはそういう国柄のようです。馬の頭数も違えば、稽古の時間なども違う。常に打ち合わせや対応をしながら何とか執行できるように進めていきました。

弓道のセミナーと馬の稽古は別の場所で別の方で行い、馬の稽古の途中で礼法講座や流鏝馬講演をする方は移動するというように、皆がそれぞれの役割をしっかりと対応していきました。ここに記載できないことがあまりに多く発生しましたが、旅の思い出ということにしておきます。ちなみに、私はここでの怪我が年末まで治りませんでした…

色々なことはありましたが、礼法講座は連日、定員を大きく超える方々がお越しになり、流鏝馬はモスクワ中央競馬場の歴史上で最も多くの拝観者（15・000人）が来られました。これは競馬場の収容人数を超えています。さらには、クレムリン内にて流鏝馬装束を着ての写真撮影を行いました。クレムリン内には弓などの武器を持ち込むてはいけないという規則を例外として認めていただきました。テレビ、新聞、ラジオなどで大きく流鏝馬は報道され、日本でも報道がなされました。

海外での公演は非常に変なことが多くありますが、より多くの方々に小笠原流を知っていただき、日本の武家文化を知っていただくことができるのはありがたいことであると思っています。

2018年度の活動報告

講座について

子ども流鏑馬教室

教場にて、子ども流鏑馬教室を行いました。6回講座で稽古着の着方や木馬での稽古、弓の引き方などを行いました。講座後、2名の方が稽古を継続されております。この事業は文化庁の助成事業として行いました。

弓道教室

埼玉県北本市にあります小山弓具併設の弓道場にて、弓道教室を行いました。毎年、弓道教

室を出られた方から門人になれる方もおられ、小笠原流の弓術の普及に貢献している教室です。また、同施設では外国人の方を対象とした弓道教室も開催しています。

礼法教室

千代田区にあり区施設の施設をお借りし、水曜日の夜に礼法教室を行っております。講師には小笠原流の礼法を稽古されている門人の方々をお願いしております。週末や平日の昼間の稽古では時間が合わない方々に小笠原流の稽古をしていただける場として大変有用な機会を提供出来ていると考えております。

女性向け礼法講座

京都駅付近にありますキャンパスプラザにて女性向け礼法講座を開講いたしました。平日夜、京都駅近くということもあり、多くの方にご参加いただいています。

広報活動について

小笠原流展開催

御茶ノ水にありますお茶ナビゲートをお借りして、小笠原流展を開催いたしました。写真の展示だけでなく、道具の展示や流鏑馬VRの作成も行いました。

体験会について

弓術体験

東京都にあります、みたけ幼稚園の園児を対象に弓術体験をしていただきました。この会は、日本の文化に触れようという趣旨で、立身流（剣術）の方と一緒にさせていただきました。

流鏑馬体験会

流鏑馬体験会を千本松牧場にて行いました。好天の中ご参加いただきました皆様には楽しんでいただけました。

小笠原流の体験会

和ナビ Japan 主催の講座において小笠原流の体験会を実施いたしました。これは、一橋大学 MBA コースの学生の方々で主に外国籍の方を対象とした講座となり、様々な日本文化を学ぶという趣旨の内容です。

その他

8月に行われたモスクワ中央競馬場での流鏑馬に協賛しました。

様々な道具の高騰にともない、門人の方々が求めやすい条件での道具の購入先などを検討しました。

道具の修繕に関わる環境整備をしました。



会員制度と特典のご案内

NPO法人 小笠原流・小笠原流教場では、新たに特別賛助会員を設置いたしました。
新規会員をご希望いただける方は下記事務局までお問い合わせください。

	個人会員	法人会員	特別賛助会員
入会金	5千円	5千円	5千円
会費ならびに寄付金	一口以上 (一口1万円)	三口以上 (一口1万円)	一口以上 (一口10万円)

※特別賛助会員は総会での議決権が付与されませんことをご承知おきください。

	個人会員	法人会員	特別賛助会員
会報「糾方」(年二回発刊)	1部	3部	20部
会報「姿」(年一回発刊)	1部	3部	20部
行事拝観	2名まで	5名まで	20名まで
メールマガジンの配信(希望者のみ)	○	○	○
年四回小笠原流に関する記事の配信*	—	—	○
冊子への社名記載	—	—	○
教場での社名記載	—	—	○
税優遇	—	—	—

*社内報などに掲載していただくことが可能です。

ご寄付のお願い

NPO法人 小笠原流・小笠原流教場では、小笠原流の伝統文化の保存と育成を目的としてご寄付をお願いしております。ご寄付をしていただける方は下記事務局までお問い合わせください。

寄付金額:1回3千円以上

寄付いただいた方には、年二回発行される会報誌「糾方」とご希望される方にメールマガジンを送らせていただきます。

税控除について

2017年に認定法人となり、ご寄付いただきますと確定申告をすることにより、税制上の優遇措置を受けることができます。

NPO 法人 小笠原流・小笠原教場

<http://www.ogasawara-ryu.gr.jp>
e-mail npo@ogasawara-ryu.gr.jp

平成31年4月1日 特定非営利活動法人 小笠原流・小笠原教場 発行
編集・発行人 小笠原清基
〒251-0037 神奈川県藤沢市鵠沼海岸 2-17-4 TEL 0466-34-4089 FAX 0466-34-4102
©Ogasawara-ryū Ogasawara-school 2019 Printed in Japan